

それでは、最初のお話を始めます。

皆さんは、月に行ってみたいと思ったことはありませんか。

人類が初めて月の上に立ったのはもう五十年以上も前のことになりました。それから今日まで、誰も月に降り立つことはありませんでした。

ところが、最近になって、民間の会社が宇宙の開発に名のりを上げるようになってきました。最初は月への着陸を目指すということですが、目的はそれだけではありません。月には水や金属などの資源がたくさん眠っています。それらを有効に活用しようということも大きな目的の一つになっていきます。例えば、月の水などを利用して農業を始めようという構想も示されています。

考えられているのは農業だけではありません。そのほかにも、様々な工場や研究所を月に置くという構想も示されています。それらが実現すると、仕事でちよつと月に行ってくるという時代が来るかもしれません。

仕事で月に行く人たちが増えていくと、ホテルなどにも必要になってきます。構想の中にはしっかりとホテルの建設ということも含まれてい

ます。そうすると、仕事ばかりではなく、観光で月に行くということも期待できると思います。

しかし、考えなければいけないこともあります。それは、いろいろな国や企業が勝手に月の利用を始めていいのだろうかということであり、どこかの国が月を自分の領土にすることは条約で禁止されています。しかし、資源の有無については明確に禁止されているとは言えない状況があります。国際的なルールの成立が早くに求められるところです。

次のお話に移ります。

東京の上野というところ、パンダのいる動物園を思い浮かべる方が多いと思います。その動物園から程近いところに大きな博物館があります。

この博物館は、絵画や工芸品など、たくさんのお宝を所蔵していることで知られています。

この博物館は、昨年、創立百五十年を迎えました。それを記念して、ふだんはあまり公開されることのない国宝を一堂に展示する催しが行われました。多くの人が訪れ、大きなにぎわいを見せていました。

実は、同じ博物館でもう一つのイベントが行われていました。それは、今から百五十年後に

国宝になっていてほしいものを集めてみようというものです。

まず、入り口で出迎えてくれたのはあのゴジラです。その先ではアニメのキャラクターがほほ笑んでいます。配達の人がよく乗っているオートバイがあるかと思えば、英単語帳などというものもありました。漫才のコーナーでは、いつい長居をしてしまいました。驚いたのは、そこには芸術作品と言われるようなものがほとんどなかったことです。

そんな中で、速記という文字が目飛び込んできました。それは、明治時代から今に伝わる怪談話を紹介する一文の中にありました。その落語家の演じる話芸が文字として今に残っているのは速記者が記録に残したからだという記述に接したとき、ちよつとうれい気分になりました。

この怪談話が百五十年後に国宝になっているかは知るすべもありませんが、この怪談話とともに、速記というものが末永く伝えられていくことを願わずにはいられません。(了)